PC-1

属格項認可条件: 初期研究

Conditions on Genitive Argument Licensing: A Preliminary Study

新沼史和・包麗娜・牧秀樹・宮﨑順大・漆原朗子
Fumikazu Niinuma, Lina Bao, Hideki Maki, Jundai Miyazaki and Saeko Urushibara

盛岡大学・黔南民族師範学院・岐阜大学・岐阜大学・北九州市立大学
Morioka University, Qiannan Normal College for Nationalities, Gifu University, Gifu University and the University of Kitakyushu

本稿は、人間言語の特質の一つである「属格主語」の分布の背後にある原理について、その改訂版を提案する。Maki et al. (2016)は、モンゴル語の調査に基づき、属格主語は、次の二つの属格主語認可条件を満たさなければならないと論じた。(i) 名詞が近くにあり、(ii) 述語連体形が近くにあること。しかしながら、現実には、名詞が近くになくても、属格主語が認可される言語も存在する。すると、 (i)と(ii)は、人間が成長する過程で習得されたとは考えにくいことから生得的であるように見えるものの、なぜある言語は、(i)を無視することができるのかという問いが出てくる。そこで、本稿では、「主語」を「項」に一般化し、次の研究課題に取り組む。「属格項認可条件 (i)と(ii)は、一定の修正のもとで、人間言語に同様に、同時に適用されうるか？」関連データを詳細に吟味し、本稿は、「属格項認可条件 (i)と(ii)は、人間言語に同様に、同時に適用されうる」と論ずる。

1. はじめに

Maki et al. (2016)は、モンゴル語調査に基づき、属格主語は、(1)の二つの条件を満たさなければならないと論じた。属格主語認可条件の考察は、以下の研究者の成果を参照せよ（Harada (1971), Harada (2002), Hiraiwa (2001), Kobayashi (2003), Maki, Bao and Hasebe (2015), Maki et al. (2016), Miyagawa (1993, 2011, 2012, 2013), Ochi (2001, 2009), Watanabe (1996)）。

(1) 属格主語認可条件（モンゴル語）
  a. 名詞が近くにあること
  b. 述語連体形が近くにあること

そして、この属格主語認可条件が、モンゴル語や日本語などの属格主語認可に共通して適用すると主張した。ところが、同じ論文内で、Maki et al. (2016)は、チャモロ語は、名詞が近くになくても、属格主語が認可されるため、述語連体形だけあれば、属格主語が認可される言語もあると述べている。すると、属格主語認可条件 (1a)と(1b)は、人間が成長する過程で習得されたとは考えにくいことから生得的であるように見えるものの、なぜある言語は、(1a)を無視することができるのかという問いが出てくる。そこで、この疑問を出発点とし、本稿では、次の研究課題に取り組む。

(2) 研究課題
  属格主語認可条件 (1a)と(1b)は、一定の修正のもとで、人間言語に同様に、同時に適用されうるか？

この課題に取り組むため、本稿では、Bao et al. (2023)の主張を基盤に、モンゴル語、日本語、チャモロ語、タガログ語の関連する構造を調査する。

本稿の構成は、以下の通りである。2 節で、本調査の背景として、人間言語の属格主語の分布をモンゴル語を例に取り提示する。3 節で、Bao et al. (2023)の主要な主張が、これまで問題となっていた例に対してどのような予測をするか見る。4 節で、3 節における調査結果が何を意味するか考察する。5 節で本稿の結論を提示する。

2. 背景

本節では、本調査の背景として、人間言語の属格主語の分布をモンゴル語を例に取り提示する。モンゴル語は、(3)に示されるように、日本語同様 SOV 言語で、また、(4)に示されるように、所有者には、属格マーカーの*-u* が付加される。ただし、日本語と異なり、モンゴル語の主格には音声がなく、*-ø* で示されている。以下、次の省略記号を使用する: 3 = third person, Acc = accusative, Adj = adjective, Adn = adnominal, AV = actor voice, BEG = begun aspect, Con = conclusive, Cont = continuous, CV = conveyance voice, CVS = converb suffix, E = ergative, Fut = future, Gen = genitive, Imp = imperative, In = infix, Inf = infinitival, Loc = locative, LV = locative voice, Nom = nominative, Obl = oblique, Past = past, Perf = Perfective, Pl = plural, PoP = possessive pronoun, Pres = present, Prt = sentence-final particle, LV = locative voice, Sg = singular, Top = topic, Unm = unmarked case.

(3) Öčügedür Ulaɣan-ø tere nom-i qudaldun-ab-čai.
yesterday Ulagan-Nom that book-Acc buy-take-Past.Con
'Ulagan bought that book yesterday.'

(4) Ulaɣan-u nom
Ulagan-Gen book
'Ulagan's book'

続いて、モンゴル語では、(5)と(6)で示されるように、単文には属格主語が現れないが、関係節内においては現れる。

(5) Öčügedür Ulaɣan-ø/*-u iniye-jei.
yesterday Ulagan-Nom/*-Gen laugh-Past.Con
'Ulagan/*Ulagan-Gen laughed yesterday.'

(6) Öčügedür Ulaɣan-ø/-u *t* qudaldun-abu-ɣsan/*-ab-čai nom-bol tere nom.
yesterday Ulagan-Nom/-Gen buy-take-Past.Adn/*-Past.Con book-Top that book
'The book which Ulagan bought yesterday is that book.'

Maki et al. (2016)は、(7)と(8)に基づき、モンゴル語においては、述語の連体形が近くにあるだけでは、属格主語が認可されないが、名詞的要素が、属格主語を c-command する位置に移動すれば、属格主語が認可されることを示した。

(7) Öčügedür Ulaɣan-u ene nom-i *qudaldun-ab-čai-siu/*qudaldun-abu-ɣsan-siu.
yesterday Ulagan-Gen thisbook-Acc buy-take-Past.Con-Prt /buy-take-Past.Adn-Prt
'Ulagan bought this book yesterday.'

(8) Ene nom-i öčügedür Ulaɣan-u *t* *qudaldun-ab-čai-siu/OKqudaldun-abu-ɣsan-siu.
thisbook-Acc yesterday Ulagan-Gen buy-take-Past.Con-Prt /buy-take-Past.Adn-Prt
'This book, Ulagan bought *t* yesterday.'

さらに、Bao et al. (2023)は、(9)の埋め込み文には、述語連体形はあるが、名詞要素がなく、(1)に照らし合わせると、誤って非文となると指摘し、その上で、(9)は、述語自体が、名詞性を持ち、それが、名詞要素として機能していると主張した。

(9) Baɣatur-ø [öčügedür Ulaɣan-ø/-u/*-i ali nom-i
Bagatur-Nom [yesterday Ulagan-Nom/-Gen/-Acc which book-Acc
qudaldun-abu-ɣsan]-i(-ni) čegejile-jü baina.
buy-take-Pst.Adn]-Acc(-PoP3) remember-CVS be.Pres.Con
'Bagatur remembers which book Ulagan bought yesterday.'

(9)は、文字通り日本語に翻訳すれば、(10)のようになる。

(10) バートルは、[昨日ウラーンが/の、どの本を買ったを] 覚えている。

埋め込み文 [...]の最後には、対格の「を」があるだけで、その直前に名詞がない。このことから、(9)における埋め込み文の動詞は、連体形であると同時に、それ自体が、名詞性を持っていると考える必要があることになる。

3. データ

本節では、Bao et al. (2023)の主要な主張が、これまで問題となっていた例に対してどのような予測をするか見る。第一に、(11)は、モンゴル語の *boltala*「まで」節内に、属格主語が出現する例である。

(11) Baɣatur-ø [boruɣan-ø/-u joɣsu-qu boltala] alban ger-tü bai-la.
Bagatur-Nom [rain-Nom/-Gen stop-Pres.Adn until] office-at be-Past.Con
'Bagatur was at his office until the rain stopped.'

(9)と同様、(11)においても、*boltala*「まで」節内の述語は、連体形であるものの、明示的な名詞要素がない。しかし、(9)の埋め込み文が、主文動詞の項となっているのと同様、*boltala*「まで」に続く文は、*boltala*「まで」の項になっており、その意味で、(11)の *boltala*「まで」節内の述語が、名詞性を持っていると考えても矛盾はない。この考え方が正しければ、(11)の *boltala*「まで」節において、属格主語 *boruɣan-u*「雨-の」が可能であるのは、その近くに、述語連体形 *joɣsu-qu*「止-む（連体形）」があり、かつ、その述語連体形が、名詞性を持っているからということになる。

よく知られているように、同じ例が日本語にも見られる。

(12) Baatoru-wa [ame-ga/-no yamu made], ofisu-ni i-ta.
Bagatur-Top [rain-Nom/-Gen stop until] office-at be-Past
'Bagatur was at his office until the rain stopped.'

(12)は、Hiraiwa (2001)が、その問題点を明確に指摘し、そして、Hiraiwa (2001)は、(12)の「まで」節における主語が属格を取りうる理由は、日本語を含む人間言語の属格主語認可条件が、(13)であることから来ると主張している。

(13) 日本語を含む人間言語の属格主語認可条件 (Hiraiwa (2021))
属格主語は、述語連体形との一致によって認可される。

(12)には、「まで」節に明らかな名詞がない。一方、「まで」の直前に来ている述語は、現代日本語では、終止形と連体形の間に形態的相違が消失してしまっているが、古語においては、明らかに、連体形である。

(14) …chi-no nagaru-ru made…

blood-Gen flow-Adn until
'…until (he) bleeds…' (*Taketori Monogatari* in Katagiri et al. (1994))

ところが、(1)の条件が普遍的であるとすると、やはり、(12)において、属格主語が認可されるためには、二つの要素が必要となる。一つは、述語連体形、そしてもう一つは、その述語が持つ名詞性である。したがって、モンゴル語においてなされたのと同じ説明が、日本語の「まで」節内部の属格主語認可にも当てはまる。

第二に、Kobayashi (2013)が提示した、述語が連用形・語幹の場合における属格主語の出現の例を見る。(15)においては、「次第」節の中の述語は、連用形となっており、(16)においては、「中」節の中の述語は、述語語幹となっている。

(15) [Hannin-ga/-no tsukamari-shidai], renraku-o kure.
[criminal-Nom/-Gen capture.Cont-as.soon.as] call-Acc give.Imp
'Give me a call, as soon as the criminal is captured.'
(Kobayashi (2013: 48) 著者による編集)

(16) [Toshokan-de gakusee-tachi-ga/-no benkyoo-chuu-ni], yuki-ga huri-dashi-ta.
[library-in student-Pl-Nom/-Gen study.Inf-during-at snow-Nom fall-start-Past
'While the students were studying in the library, it started to snow.'

ここで、以下の議論のために、研究課題 (2)における「主語」を「項」に一般化し、研究課題 (17)に改定する。すると、(15)と(16)は、(1)を(18)のように修正すべきであることを示している。

(17) 研究課題
属格項認可条件 (18a)と(18b)は、人間言語に同様に、同時に適用されうるか？

(18) 属格項認可条件（普遍）
a. 名詞が近くにあること
b. 述語<u>非終止形</u>が近くにあること

(18)の下では、モンゴル語の例も Kobayashi (2013)の例も、すべてその文法性が予測できる。注意すべき点は、モンゴル語においても、Maki et al. (2016)が「述語連体形」と記述しているものも、実際には、「述語非終止形」であることである。(15)においては、「次第」節の中の属格主語は、述語連用形と名詞「次第」に認可され、(16)においては「中」節の中の属格主語は、述語語幹と名詞「中」に認可されている。

第三に、チャモロ語の例を見る。(19)は、平叙文で、主語は、属格になっていない。

(19) Ha-fahan si Maria i sanhilo'-ña gi tenda.
3E.Sg-buy Unm Maria the blouse-her Loc store
'Maria bought her blouse at the store.' (Chung (1982: 50, ex. 34b) 著者による編集)

(19)における目的語が疑問語となり、文頭に移動すると、主語が、*ña* 'her'で示されるように、属格となっている。

(20) Hafa f-in-ahan-**ña** si Maria gi tenda?
what In-buy-her Unm Maria Loc store
'What did Maria buy at the store?' (Chung (1982: 50, ex. 34a) 著者による編集)

ところが、(21)のように、*taimänu* ‘how’が前置され、これ自体は名詞ではないにも関わらず、主語が属格 *mu* ‘your’になっている。したがって、名詞要素がなくても、属格主語が可能である。

(21) Taimänu malago’-mu si Pedro pära u-arekla i lareta t?
how want.Wh.Obl-your Unm Pedro Fut he-fix.Wh.Adj the car
‘How do you want Pedro to fix the car?’ (Chung (1998: 211, ex. 9b) 著者による編集)

実際、(20)と(21)の主文の述語は、名詞化されている。となると、(20)と(21)における属格主語は、Wh-Agreement によると記述されるものの、実際には、名詞化された述語（述語非終止形）とその述語の名詞性によると言える。

第四に、同様のことが、オーストロネシア語のタガログ語にも当てはまると言える。タガログ語では、(22a)–(22d)において、主格は、それぞれ、猫、鼠、皿、犬であり、属格は、それぞれ、鼠、猫、猫と鼠、猫と鼠である。

(22) a. k<um>áin nang=dagà sa=pinggan pára sa=áso ang=púsa
<AV:BEG>eat **Gen=rat** Obl=plate for Obl=dog Nom=cat
b. k<in>áin-ø nang=púsa ang=dagà sa=pinggan pára sa=áso
<BEG>eat-PV **Gen=cat** Nom=rat Obl=plate for Obl=dog
c. k<in>aín-an nang=púsa nang=dagà ang=pinggan pára sa=áso
<BEG>eat-LV **Gen=cat** **Gen=rat** Nom=plate for Obl=dog
d. i-k<in>áin nang=púsa nang=dagà sa=pinggan ang=áso
CV-<BEG>eat **Gen=cat** **Gen=rat** Obl=plate Nom=dog
‘The cat ate a rat on the plate for the dog.’ (Kaufman (2009: 3) 著者による編集)
AV=actor voice, BEG=begun aspect, CV=conveyance voice, LV=locative voice, Obl=oblique case, PV=patient voice

これらの例には、一見したところ、属格項認可条件 (18a, b)が当てはまらない。しかし、Kaufman (2009)は、(22a)–(22d)の述語は、すべて名詞化されていると主張している。すると、述語非終止形とその述語の名詞性によって、属格項が自動的に認可される。

4. 議論

本稿の議論が正しければ、研究課題「属格項認可条件 (18a)と(18b)は、人間言語に同様に、同時に適用されうるか」に対する回答は、肯定的であることにある。

さらに、(18a)と(18b)は、属格目的語を含む例にも自動的に適用される。

(23) Kono hito-wa Angeles-ga sukida.
this person-Top Angeles-Nom like
‘This person likes the Angeles.’
(24) Angeles-ga/-no sukina hito-wa kono hito da.
Angeles-Nom/-Gen like.Adn person-Top this person be.Pres
‘The person who likes the Angeles is this person.’

(23)は、状態述語を含み、単文においては、目的語が主格で現れる例である。(24)においては、その目的語が、関係節においては、属格で出現できる。この例においても、この属格項は、関係節主要部名詞と述語非終止形（連体形）によって認可される。

さらに、「方」に続く節においても、目的語が属格で現れる。動詞「打つ」は、他動詞で、単文においては、その目的語は、対格を伴って出現する。

(25) Shohei-wa hoomuran-o utsu.
Shohei-Top homerun-Acc hit
'Shohei hits homeruns.'

この動詞句が「方」に続くと、目的語は、属格を伴う。この際、述語は、連用形になっている。

(26) Shohei-wa hoomuran-no uchi-kata-o shitteiru.
Shohei-Top homerun-Gen hit-way-Acc know
'Shohei knows how to hit homeruns.'

そうすると、(18a)と(18b)のもとでは、この属格項は、名詞「方」と述語非終止形（連用形）に認可されていると言える。

最後に、属格項の出現に関するよく知られた現象を見てみる。スラブ諸語において、否定辞と属格目的語が共起するという現象がある。ロシア語の例を見てみる。

(27) a. Saša pokupaet žurnaly.
Sasha.Nom buys magazines.Acc
'Sasha buys magazines.'
b. Saša ne pokupaet žurnaly/žurnalov.
Sasha.Nom Neg buys magazines.Acc/magazines.Gen
'Sasha does not buy magazines.' (Bailyn (1997: 85))

(27a)は、否定辞を含まない単文である。(27b)には、否定辞 *ne* が加わり、その結果、目的語が、属格を伴って出現することができる。ここで次の疑問が生ずる。属格項認可条件(18a)と(18b)は、スラブ諸語の否定辞と共起する属格目的語にも適用するかという疑問である。本稿では、その解答は、否定的であるとする。というのも、(27b)の意味は、おおよそ、(28)のようであるからである。

(28) Sasha does not buy **any** of the magazines.

つまり、

(29) [NP **any** of them]

の構造を持ち、この *of* が属格として表出している可能性がある。したがって、この属格は、動詞によって付与されたものではない可能性があり、(18a)と(18b)においては、述語の名詞性が決定打の一つとなっていることから、(18a)と(18b)は、スラブ諸語の否定辞と共起する属格目的語の認可には、無関係であると考えられる。

5. 結論

本稿は、研究課題「属格項認可条件 (18a)と(18b)は、人間言語に同様に、同時に適用されうるか？」

(18) 属格項認可条件（普遍）
a. 名詞が近くにあること
b. 述語非終止形が近くにあること

に取り組んだ。関連データを詳細に吟味し、それらのデータは、次のことを示唆していると論じた。(18a)の「名詞」を「名詞性」と解釈することによって、述語自体が「名詞」の役割を持ち、属格項の認可者となりえ、また、(18b)のように、述語の形態を「述語非終止形」に改訂することで、その形態の述語が、属格項の認可者になりえるということである。この議論が的を射ているなら、研究課題に対する解答は、「属格項認可条件 (18a)と(18b)は、人間言語に同様に、同時に適用されうる」ことになる。

参考文献

Bailyn, John F. (1997) "Genitive of Negation is Obligatory," *Formal Approaches to Slavic Linguistics* 5, 84–114.

Bao, Lina, Hideki Maki and Saeko Urushibara (2023) "What Do Mongolian Case-Marked Clauses Suggest?," *JELS* 40 (Papers from the Fifteenth International Spring Forum of the English Linguistic Society of Japan), 175–181.

Chung, Sandra (1982) "Unbounded Dependencies in Chamorro Grammar," *Linguistic Inquiry* 13, 39–78.

Chung, Sandra (1998) *The Design of Agreement: Evidence from Chamorro*, The University of Chicago Press, Chicago.

Harada, Naomi (2002) *Licensing PF-Visible Formal Features: A Linear Algorithm and Case-Related Phenomena in PF*, Doctoral dissertation, University of California, Irvine.

Harada, S.-I. (1971) "*Ga-No* Conversion and Idiolectal Variations in Japanese," *Gengo Kenkyu* 60, 25–38.

Hiraiwa, Ken (2001) "On Nominative-Genitive Conversion," *MIT Working Papers in Linguistics 39: A Few from Building E39*, ed. by Elena Guerzoni and Ora Matushansky, 66–125, Cambridge, MA.

Kaufman, Daniel (2009) "Austronesian Nominalism and Its Consequences: A Tagalog Case Study," *Theoretical Linguistics* 35, 1–49.

Kobayashi, Yukino (2013) *Japanese Case Alternations within Phase Theory*, Doctoral dissertation, Sophia University.

Maki, Hideki, Lina Bao, Wurigumula Bao and Megumi Hasebe (2016) "Scrambling and Genitive Subjects in Mongolian," *English Linguistics* 33, 1–35.

Maki, Hideki, Lina Bao and Megumi Hasebe (2015) *Essays on Mongolian Syntax*, Kaitakusha, Tokyo.

Miyagawa, Shigeru (1993) "Case-Checking and Minimal Link Condition," *MIT Working Papers in Linguistics 19: Papers on Case and Agreement II*, ed. by Colin Phillips, 213–254, Cambridge, MA.

Miyagawa, Shigeru (2011) "Genitive Subjects in Altaic and Specification of Phase," *Lingua* 121, 1265–1282.

Miyagawa, Shigeru (2012) *Case, Argument Structure, and Word Order*, Routledge, New York.

Miyagawa, Shigeru (2013) "Strong Uniformity and *Ga*/*No* Conversion," *English Linguistics* 30, 1–24.

Ochi, Masao (2001) "Move F and *Ga*/*No* Conversion in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 10, 247–286.

Ochi, Masao (2009) "Overt Object Shift in Japanese," *Syntax* 12, 324–362.

Watanabe, Akira (1996) "Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-linguistic Perspective," *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373–410.

資料

Katagiri, Yoichi, Shoji Takahashi, Teisuke Fukui and Yoshiko Shimizu (1994) *Shinpen Nihon Koten Bungaku Zenshuu (Vol. 12): Taketori Monogatari, Ise Monogatari, Yamato Monogatari and Heichuu Monogatari* (Japan Classical Literature Series: New Edition (Vol. 12): *A Tale of Taketori, A Tale of Ise, A Tale of Yamato and A Tale of Heichuu*), Shogakukan, Tokyo.

連絡先メール住所: Fumikazu Niinuma <niinuma@morioka-u.ac.jp>